

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	テオドール・フルルノワ『インドから火星へ』：第五章火星の輪廻(2) (翻訳)
Sub Title	Théodore Flounoy, Des Indes à la planète Mars : chap. 5 Le cycle martien (2) (traduction)
Author	小野, 文(Ono, Aya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.74 (2022. 3) ,p.53- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ガボリオ・マリ教授退職記念論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20220331-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

テオドール・フルルノワ 『インドから火星へ』

——第五章 火星の輪廻（2）（翻訳）——

小野文

III. 火星物語の登場人物

火星とのコミュニケーション全体を物語と呼ぶことで、私の目にはこれが純粋に想像力の作品と見えると私は言いたいのであって、いわゆる小説や物語と呼ばれる創作にある、統一感や内部連結、一貫したプロットや、関心の高まりが大団圓を迎える、といった性格があると言いたいわけではない。火星物語はバラバラの場面や光景の連なりでしかなく、そこには秩序や緊密な連関は見られず、それぞれに共通することがあるとしたら、そこで話されている見知らぬ言語、頻繁に出てくる同じ登場人物、そしてある意味オリジナリティーがあるもの、すなわち風景に現れる、エキゾティックで特異な、定義しがたい色や質、建造物、服装等である。骨組みというか、より正確にはプロットには、過去の痕跡というものがない。この雑多なエピソードの推移のなかに出てくる様々なエキストラの間に、親族的関係あるいは社会的関係をきちんと再構成することさえできないのである。

当然のことながら私はスマス嬢の交霊会から知り得たこと、あるいは自然に生じたヴィジョンを彼女が存分に思い出してその後語ってくれたことしか話さない。しかしそれは、こうした情報全てが現れ出てきた隠れた奥底について即断することをよしとしない。表面上は断片的で支離滅裂に見ても、火星物語が育まれた内奥では連続性が存在していたのかもしれない。そのあ

いだに繋がりのない、一時的な創作物と見えるものは、地下層の湧出点、噴出にすぎず、普通の自我には知られないもののそれ自体では意識的であり、通常の目覚めた状態の意識層の下にあって、途切れることなく拡がっているのである。

靈媒のなかには、欠落や浸食のないまま、かなり長い中断を伴う無意識的交信を続ける者もあり、彼らは、前回のメッセージが終わったまさにその場所から、時には語や点のレベルでの正確さで、新しいメッセージを発信して全体を構築する。いったい作品が本当に発作的に、主体の意識に湧き上がってくるまさにその瞬間に創られているのか、自問するむきもあるう。あるいはいったいその作品は、連続して書き続ける新聞小説家が自分の労作を定期的にしか出版しないのと同じように、絶え間なく、無意識的と言われる理知の闇のなかで続けられ、そして連続的な準備期間中に溜まった産物を小出しにしているのだろうか？　スミス嬢の火星語の場合、彼女のヴィジョンには続きがなく、全部を一緒にしても統一体を形成するわけではなく、複数の構成物から来ているような雑多な集まり、あるいは断片のモザイクにしかならないのだから、問題はいっそう混乱を極める。まるで次のチャプターに繋がる文章群を出てきた順に読んで、その全体像を知ろうとするようなものである。

このバラバラの交信の連続に、体系的な繋がりのねらいの全くない、偶然にまかせた気まぐれな即興だけを見て取ることももちろんできる。その場合、似ている点や接觸点、火星語という共通項は、それらが時々ほぼ常に同じように生じる、ある精神状態、ある特別な感情の持ちよう単に起因するということになる。私達がある決まった身体的あるいは精神的条件に身を置くとき、同じような夢を見たり、同じような悪夢のカテゴリーに陥ったりするようである。同じような状況に陥ったときに似たような夢が生まれることは容易に説明できるし、間隔をおいて同じ夢が下意識のなかで続いていると認めない理由は何もない。

けれども火星の輪廻の混沌は見かけだけのもので、作品全体のほんの

一部しか私達が目にしていないせいでそう見えるのだと推測することができる。その場合、火星物語はエレースの下意識のクリエイティブな想像力のなかで、しっかりと連結した一総体であり、まだ完結はしていないだろうが、様々な筋は結び合って良い順序で流れているということになる。千里眼を持った心理学者がいて、その能力でスミス嬢の心的個体のうちに起こる全てのことを目撃できるのであれば、この火星物語の構成の途切れない発展を見守ることもできるだろう。そしてこの構築物が日中に、意識下において、仕事の用務に没頭しているエレースの通常の人格の知らないところで、ゆっくりと築かれるのを見るだろう。目覚めたときには不幸にも忘れられる夜の夢から多くの糧を得ながら。また短い余暇の時間や朝早くや夜遅く、目覚めと睡眠の間の曖昧な時間に、驚く彼女の耳や目に、時に不思議なイメージや理解できない会話として突如現れながら。そして交霊会の夢遊症によるヴィジョンのなかで、より拡がりをもって展開しながら。残念なことに、千里眼能力は、鋭敏なプロの女占者ならまだしも、心理学者には尚のこと稀であり、被験者の下意識の秘め事について私達が知り得るのは、些細なヒント、ちょっとした閃きのみであって、参加が許可された交霊会からや、自發的恍惚状態のあとで稀に残っている記憶から得るしかないが、それも彼らが知らせてくれる気持ちのある場合には、である。よって火星の夢における一貫性と下意識的不統合の問題は、解決をあきらめなければならないのだ。

問題に決着をつけるわけではないが、私の気持ちとしては、やはり火星物語がエレースの深層心理のなかで、拾い集められた断片から判断できるよりも、ずっと大きな連続性と拡がりを持つものとしてあると捉えたい。私見では、私達が手にしているのは別々のチャプターから手当たり次第にはぎ取られた数枚のページのみであって、巻の大半は知られないままにあり、私達が持っている僅かなものだけでは、十分にそれを再構成できていない。よって私達は、内容が重要であったりなかつたりする、時間軸とは無関係の切れ端だけで、またそこに出てくる主要人物に合わせてそれをまとめるだけで、満

足しなければならないのである。

火星の幾つかのヴィジョンの背景を占めている無名で雑然とした人々の群れは、男女に共通する幅広のワンピース、平らな帽子、足に紐で結わえられているサンダルを除いて、私達の国の人々と違っているわけではない。そこには特筆すべきものはない。関心に値するのは、よりはっきりと現れる少数の人物で、彼らはそれぞれ名前をもっており、それらの名前は常に男性であればéで、女性であればíで終わる。ただ唯一の例外はエズナル¹⁾で、彼は通訳としての役割を果たしながら、靈肉分離した火星人として独自の位置を占めているのである。

エズナル

1896年10月22日に、火星語の意味を得られる一手段として、他に何の説明もないまま、この名前が私に示されたのを既に見た（〔原著〕149頁）。この名前の持つ魔力に最初に頼ったとき（11月2日、〔原著〕150頁参照）、私達に知られたのは、これは過去に火星に住んでいた人で、レオポールは惑星間の宇宙空間で最近彼と知り合ったということのみだった。ミルベル夫人が出席した次の回（11月8日）、つまり彼女の息子アレクシの化身が現れて翻訳をしたあと（前掲文章3）に初めて、出席者の質問に答えて——これは十分暗示として働いた可能性があるが——、レオポールは左手の人差し指で、エズナルはアレクシ・ミルベルだと示したのである。この二人が同一人物であったことは最初からあった事実で、ミルベル夫人の参加した会の最後に明らかになるまでレオポールが秘密にして楽しもうとしたのか、あるいは私が考えているように、周りの状況を受けて会の最中に同一化がなされたのか、見極めが難しいことはお分かりだろう。いずれにせよ、この二人が同一人物であることはそれ以降変わらなかった。

1) この名前に關して、〔原著〕149-150頁に挙げたレオポールの詩行に与えたアクセントなしの綴りを私はそのまま使っているのだが、スミス嬢はいつも「エズナル」と發音していた。その由來は、他の全ての火星の名前と同様に、不明である。

火星語の通訳としては、エズナルに有り余る才能があるわけではない。聞き取れたばかりの文章の意味を教えてもらうために、しばしば彼には頼み倒さなければならなかつたし、エレースの額を押したり擦ったりしながら彼の名を何度も繰り返さなければならなかつた。彼は確かにすばらしい記憶力に恵まれており、エレースが何週間も前に、ときには5、6ヶ月前に聞いた火星語で、まだ翻訳の機会に恵まれていなかつた文を忠実に再現し、一語一語翻訳することができた（文章24）。しかし彼がやる気を示すのは、まだ翻訳されていないこのような文章に限つてであった。たつた二回だけ、彼が自分の意志で大して重要でない語を付け加えたこともあつたが（文章15と36）、彼が以前の文章を同じように翻訳するかどうか確かめるために、またそれを補うために、すでに翻訳された古い文章に立ち返らせるということは決してできなかつた。例えは文章19は、そのときにきちんと翻訳してもらうのを忘れてそのままになつてしまつたもので、私が後に（1899年6月4日）未知の語 milé piri の意味を得ようと思っても、無駄な努力に終わつた。同じように文章24も、最後のほうの会話の途中に、全てを記すにはあまりに火星語が漠然としていたので、エレースは三つの語しか擱むことができなかつたのだが、その欠落部分をエズナルは埋められなかつた。まるで厳しい宿題を最後までできるものと思い上がつた小学生が、頼まれてもなかなか終わりまでやろうとしないのと同じように、訳して欲しい文章があつても、エズナルは所々の文章しか彼の辞書で探してくれず（あるいは思い出してくれず）、それ以上でもそれ以下でもなかつた。課された翻訳をやり終えると、エレースの溜息と痙攣とともに彼は飛び立つてしまい、どんなにそれを後で思い出してもらおうとしても駄目だった。

アレクシ・ミルベルとしては、〔原著〕138頁と144頁で要約した最初の火星の交靈会の後、まずまず憐憫をもよおす化身の場面で、エズナルはしばしば母親に親愛と慰めを示す感動的なメッセージを与えていた。しかしながら注意を喚起しておきたいのは、この後も息子としての役割を表す機会に恵まれていなかつたわけではないのに、ここ二年近くはそれを完全に放棄しているように見えることである。この種のメッセージとして最後のものは

(1897年10月10日、文章18)、ある不思議な交霊会の一ヶ月後に与えられたが、その交霊会ではレオポールが自発的に——誰もその話題を差し向けてわけではないのに——エズナル・アレクシの最初の顯現にある明らかな矛盾を説明する必要があると考えたようだった。以下がこの交霊会の要約と、レオポールとの交信記録である。

1897年9月12日。目覚めたままで幾つかのヴィジョンを見たあと、スミス嬢はレオポールがしゃべっているのを聞く。目をつぶって眠っているような感じで、彼女は弱くゆっくりした声で機械的に、彼女のガイド靈が語る次のような言葉を繰り返した（下では括弧に入れて示したが、彼女は幾つかの語が理解できないといって二回中断した）。

これからよく注意して。彼ら〔出席者たち〕にできるだけ動かないようにと言うのだ。驚異現象を台無しにしてしまうのは、しばしば人が行ったり来たりしたり、よく飽きもせず無駄なおしゃべりをしてしまうからだ。——覚えているかい、数ヶ月も前のことだが、若い男、アレクシ・ミルベルが彼の母にアドバイスを与えるためにカルージュの……氏（彼の言った言葉は分からなかった）の家の会合に来たのを²⁾。そう、あの時彼は、……として蘇った……（言葉は理解できなかった）で二日前に死んだばかりだったのだ。お前には知らせておきたいのだが、それだから彼は、肉体と靈が消えかかっている時に、前世のこと、すなわちこの地上での最初の生のことを改めて思い出したのだ。彼は記憶の呼び戻しで、自分の最初の母を認めただけでなく、彼女と話していた言語もまだ話すことができた。しばらくたって、心がようやく落ち着いたときに、彼はこの最初の言語をすでに思い出せなかった。彼は戻ってきて、彼女〔母親〕を包み込み、喜んで彼女に会うが、お前たちのことばで話しかけることはできない。言葉が彼に戻ってくるのかどうか、私は知らない

2) ルメートル氏の家であった1894年11月25日の交霊会のことを言っている。
〔原著〕138頁参照。

し言うこともできないが、私はそう信じている。さあ、これから聞くのだ。

ここでスミス嬢は目覚めたようで、目を開き、長い火星のヴィジョンを見てその詳細を語った。彼女は最初に黄色いワンピースを着た少女を見、その名前アニニ・ニカイネを聞いた。少女はいろいろな遊びに夢中になっていた。例えば彼女は棒をふって、空色の水がいっぱい入った、浅くて大きい白色の器のなかで密集したグロテスクな小さい人形を踊らせていた。それから別の人達がやってきて、最後にアスタネが来たが、彼は指先にペンを持っており、少しづつエレーヌの腕を擗むと、彼女を完全なトランス状態に入らせ、文章17を書き取らせた。

このレオポールの自発的な説明は、靈媒の夢の一貫性のなさに少しばかり秩序と論理を持ち込もうという闇下の気遣いをはっきり裏切ってしまっている点で興味深い。これは過去の出来事と現在支配的な考えの間に合意を取り付けようとする正当化のプロセスと回顧的解釈のプロセスの一形態である（[原著] 140頁参照）。この種のものとしては、レオポールがおそらく長いこと反芻してから取り入れた理論は、出来が良いとは言えない。だが不可能なことは誰もできないのだし、彼には他に良い策もなかったのだろう。まずこの理屈では、心靈主義の教義とは反対に、記憶は、休息期間の後よりも、死んだ後の「消滅」の初期のほうがはっきりと残っているとする。一方、交靈術者は絶えず、靈肉分離の後は混乱状態が長く続くと主張している。次に、調和を取ろうとする必要の無理から、レオポールの記憶は事実を全く歪曲している。アレクシ・ミルベルが靈体分離した状態では全くなないこと、最初の二回の会（[原著] 138頁と143頁）を参照すれば明らかである。彼はそこで現実の火星人になりきっており、ラスペイユの講演を聴いたり、スミス嬢が火星に着いた際に彼女と出会い、アレクシが大きな男の子であるのに彼女は驚いたりしているのである。そして最後に、なぜレオポールはアレクシ・ミルベルの物語から細かい点での矛盾を取り除こうとしなかったのだろうか？ 火星の年月は私達の年より二倍進むというのに、どうやって実際に

は1891年7月に私達の地球で亡くなった彼が、間を置かずに火星に転生したとしても、彼がそう主張しているように、5、6歳になっている（[原著]144頁）ということが1896年2月2日の交霊会の時点でありえるのか？どうしてこの同じ会では全くフランス語が話せないので、15ヶ月前には流暢に話しており、そして会の一年半後には翻訳者としての勤めを十分に果たし始めるのに、自分の可哀想な母親には愛情のこもった言葉もさようならの一言も言えないということになるのだろう？ 等々。

人は私におそらくこう答えるだろう——そして私はどう返していいのか分からぬ——すなわち、私がオカルト哲学の奥義を知らないことが、私の理解を妨げている障害の唯一の原因であって、この経験論的世界の卑俗さにどっぷり浸かっていない知性には、こうした障害は全く存在しないのだと。例えば、全てが丸く収まりレオポールの説明にも沿うようするなら、私達のあべこベイメージの現実とは違って本当の現実では、1896年2月2日の交霊会は1894年11月25日の交霊会より前にあったと考えれば良い。そうすると最初の会のときにアレクシ・ミルベルは火星で生きているうちにフランス語を忘れてしまったのだということになり、次の会でそれを思い出すとすれば、それは彼が再び霊肉分離をしたからで、講演会場は現実としてではなく「靈力のはたらく場面」として捉えるべきだということになる。一年か二年の間の時の流れを単に逆転させるということ、それは天体の神秘や四次元空間より信じがたいことでもないが、そうすればエズナルの話は非常にすっきり通ることが分かるだろう。一方でこれを受け入れるまで十分にお利口になつていの者達は、混乱をひきおこす明らかな矛盾を前に、頼みの綱として夢の気まぐれや連想の偶然に原因を求めるしかないだろう。

よくよく考えれば、スミス嬢の闇下の思考は、私を煩わせている障害をそれほど感じていないのではないかと思うし、またこれらが不可能だと思う隠れた意識が、レオポールが1897年9月12日に試みた説明で一掃されるよりは勢いづけられて、アレクシ・ミルベルの役を出し物のリストから削除することになり、私達の地上世界との歴史的付着から更に解放された様相を火星物語に帯びさせることになったのではないか。

エズナルに関しては、霊肉分離した通訳としての役目が、舞台裏、つまりにあちらの生者たちが認識可能な火星の現実の外に彼を留ませたこと以外、他に大して付け加えることはない。唯一あるとすれば、それはスミス嬢の霊媒としての視線が彼を時たま捉えたということだろうか。彼は流れるように浮かんで火星の庭や古い仲間たちの間を漂っていたが、彼らにはエズナルが見えないのであって、それは霊媒でない私達のような地球人が、私達の周りを絶え間なく彷徨っている数え切れないほどの魂、空中の靈力やハデスの亡靈の触知できない大集団が、私達の家や周辺を神秘の存在で満たしているというのに私達にはそれが見えないのと同じである。

アスタネ

「偉大な人アスタネ」は、カンガという名のヒンドゥー教の行者、すなわちシマンディニの献身的なパートナーで友人でもある男性の、火星における生まれ変わりである。彼は新しく転生した身でも、インドですでに持っていた学者あるいは魔術師という特殊な性質を保持しており、また彼は同じく、スミス嬢に成りかわったかつての姫君への愛情をそのまま忘れないでいるため、しばしば魔力を用いて彼女を呼び出す、すなわち住んでいる場所の遠さにも拘わらず、彼女と霊的な交信に入るのである。そもそもこの降霊の手順と方法は神秘に包まれている。エレーヌが火星のアスタネと夢遊状態のあいだに合流しているのか、それともアスタネが霊体として彼女のほうに降りてきて彼方の惑星の息吹を伝えているのか、分からぬ。より正確に言えば、日によって前者だったり後者だったりなのだろう。アスタネが交霊会の最中にトランス状態のエレーヌに、「ちょっとこちらにおいて、この素敵なお花を眺めにおいて」と言うとき（文章8）、あるいは彼の火星の住まいにある面白いものを見せるとき、彼が本当に空間を超えて彼女を呼んでいるのは確かに思える。だが、エレーヌが目覚めている間、彼女の浴槽やベッドのそばに彼が現れて、この薄汚れた地上に彼女がいることの悲しさを訴えたりするときには、彼が彼女のほうに降りてきて、あちらのヴィジョンを生み出させているのだと認めなくてはならない。いずれにせよ、要するに、この

ファンタジーの高次のトリミングにおいて、それほど論理や正確さを要求してはならないのである。さらに留意すべきは、アスタネがこのように出てくるときには、視覚的・聴覚的な幻としてしか現れず、触覚や全般的な感覚としては決して現れ出ない、ということである。エレーヌの情感的領域において、アスタネの存在はつねに大いなる静謐と至福感、法悦状態を伴っており、それはアスタネ自身がかつての熱愛対象を見いだして感じる幸福と相関し、また対になっている。

アスタネの身分、つまり彼の名前や魔術師としての位、そして前世では地上に生きるカンガという名の人間だったことは、最初から明らかにされたわけではない。しかしながら、最初に現れたときから（1896年9月5日）、彼は人々より上位にいるように振るまっている。というのも彼のみが、私達には知覚不能なメカニズムの飛行マシンを所有しているからである。続く数週間、スミス嬢は彼の名を聞き、また何度も彼に再会したり彼の家を見たりするが（図12）、彼の正体や「霊媒」としての力について知らされるのはそこから2ヶ月半後まで待たなくてはならなかった。それは私が出席していなかったとき、また例外的にエレーヌが完全に眠りに陥らなかった会合のなかでであった。クエンデ氏の助けにより執られた記録から作ったレジュメがこれである。

1896年11月19日。先の複数の会合とは違って、スミス嬢はつねに寝覚めた状態にあり、両腕はゆったりとテーブルの上において、出席者と話し合ったり、笑ったりまでしていた。メッセージはヴィジョンによって、またラップ音の書き取りでもたらされた。——エレーヌはレオポールに、どうして火星に転生してまだ生きている存在と彼女自身が交信できたのかを尋ねていたのだったが、そこでアスタネが火星の服ではなく、東洋の服を着て現れるヴィジョンを見た。「どこで私はこういう服を見たんでしょう？」と彼女が尋ねると、テーブルは「インドでだ」と答え、アスタネが火星に転生する前はインドに生きていたことを示唆したのだった。同時にエレーヌは、前にすでに見たことがあるようだれ

どどこだかは分からない、東洋の風景のヴィジョンを見た。そこに彼女はアスタネを認めたが、彼は腕にくすんだ白の巻物を抱えており、これもまたすでに見たことのある、同じように東洋風のなりの女性の前で、東洋風のおじぎをしているところであった。これらの人々は「彫像みたいに動かない³⁾」ように彼女には見えたので、出席者たちは、もしかしたらレオポールが見せている〔過去〕単なる絵画ではないのかと尋ねる。テーブルはその通りだと答え、周りが「この東洋風の女性は誰なのか」と尋ね、もしかしたらシマンディニを表しているのではないかと考えを述べたときには、意味ありげに繰り返しスマス嬢のほうに傾く。最後に出席者の新たな質問に対して、テーブル（レオポール）がさらに書き取らせることには、アスタネはインドに生きていたころはカンガという名前で、その時代の魔術師であった。火星にいるアスタネは、彼がインドにいたときと同じ降霊能力を持っているとのこと。周囲はさらにレオポールに、アスタネの能力はレオポールのものより優れているのかと尋ねると、それは違う能力で、おなじぐらい価値に溢れている、とテーブルは答える。ついにエレーヌが、アスタネがエレーヌを呼び出すときにはアスタネは現在の彼女の姿や特性を見ているのか、それともインドにいたころの姿なのかと知りたがると、テーブルはインドにいたころの姿だと認め、加えて、したがって、シマンディニの特性とともに、今日エレーヌが持っている驚くべき特性である、と、シマンディニの名前の「N」を強調しながら答える。

この会合においては、アスタネの過去についての情報全てを提供したのが

3) エレーヌの霊媒性を発展させた集まりの人々は、心霊主義の象徴にも詳しいのだが、それによると「動かない彫像」という表現が意味するところは、現れてきた人物たちはいまや受肉して生きており、ヴィジョンは現在時の彼らではなく、彼らがある役割を果たしていた過去の出来事に関係があるということである。霊媒が目前にするものは、現在の現実ではなく、過去の「心靈波のイメージや画」のみなのである。

レオポールであること、そして彼がアスタネに自分とほとんどおなじぐらいの能力を認めていると気づかれるだろう。スミス嬢専属のガイド靈を自認するレオポールが、ふだんは彼女に対する自分の権利に執着し、また自分のライバルとおぼしき者には過剰なまでに疑り深いのに対し、アスタネには自発的にかなりの特権を認めているのは不思議である。レオポールとアスタネという二人がエレーヌに対して驚くほど立ち位置が似ていることを考えると、この思ってもみない平静さにはなおさら驚かされる。シマンディニの人生においてヒンドゥー教の行者であるカンガは、マリー・アントワネットの人生においてカリオストロが占めていたのと全く同じ位置にいるのであって、役立つ忠言をしてくれる魔術師であると同時にプラトニックな崇拜者であり、また二人ともスミス嬢に対して、現在のアスタネとレオポールという役割のなかで、華々しい前世で持っていたような懃慄な愛情を抱き続けているのである。もはや地上の人ではないというこの二人の人物が、エレーヌに対して同じ根拠でもって自分の権利を主張しているはずなのに、お互いに憎み合わないのはどういうわけなのだろう？　いまや自らの専有物をめぐって争うどころか、彼らは感動的なやり方でお互いに助け合ってもいるのである。アスタネがスミス嬢の右手を使って火星語を書いている際、参加者が物音をたててそれを邪魔したりするときには（文章 20 参照）、左腕のジェスチャーで彼らを黙らせようと助けにくるのはレオポールである。レオポールが私にエレーヌの額に触る瞬間を教えてくれるとき、彼女に鉛筆を渡してメッセージを書き写すように手を支えるのはアスタネであり（少し後の 1897 年 9 月 12 日の会合と、図 23 を参照）、彼らのあいだの力の受け渡しは、靈媒のうちになんの動搖も引き起こさず、また彼らの書き方の違い以外に、その動きが顕著になることもない。確かにレオポールのほうがずっと頻繁にエレーヌに現れており、憑依もより完全ではある。それに比べるとアスタネの憑依はとびとびにしか現れず、また決して彼女の口から直接話すまでには至っていないからである。しかしそれは構わない。重要なのは、この二人の人物は——もし彼らが本当に二人なのだとして——お互いに我慢しあうにはあまりにも似すぎている。

もう私の結論がお分かりだろう。アスタネは、よくよく検討すれば、結局インド＝火星の世界におけるレオポールの姿の写し、重複物、差し替えでしかない。これはひとつの同じ原初テーマの、二つのバリエーションなのである。この二つの存在を見るにつけ、これまでに分かったところでは、二人は客観的で実在する個体性を持たず、仮の人格、夢がつくる虚構、スミス嬢の意識が催眠状態にあるとき創り出す幻想の下位区分と私は見なしており、言ってみれば同じ根源的感情、同じ情愛状態がこの双子の役割を生じさせたのであって、それを下意識の想像力が多様な状況の違いに細部にいたるまで適合させたのである。高貴な婦人への強い憧れと現実の悲しむべきアイロニーとの乖離をつらく感じる気持ちが、並行して二人の悲劇的な前世の存在——場所と時代は違うものの内在的には同じである——を湧き出でさせたのだった。一人はアラビアの高貴な身分の娘で、インドの王女となるが、専制君主である夫の墓の上で生きながら焼かれた女性、もう一人はオーストリアの王族で、フランスの女王となりながら、運命の夫の受難を分かち合って死んだ女性。同じように、同じ一つの感情の源から生まれた二つの夢のなかでは、驚異に対する人間の想像力の普遍的・恒常的な性向が、尊敬と多少の崇拜を捧げてくれる保護者を求める女性的な欲求と一緒にになって、一方ではカンガ＝アスタネの人物像の全てのピースを作り上げ、また他方では、真実の歴史を気にもかけずに改変して、カリオストロ＝レオポールの人物像を吸収したのである。二人はどちらも理想主義的な魔術師であり、学問に精通し、心優しく、この不運な姫君のために惜しみなく知恵を貸し、崇拜と呼べるほどの献身をもって、この存在を取り巻く苦い経験全てのただ中において彼女の盾となり、最大の慰めとなっていたのだった。そして現在の地上の生の営みにおけるエレーヌ・スミスの導き手レオポールの役割は、エレーヌが火星の軌道に飛び乗るため私達の世から逃れるこの瞬間の生において、アスタネが同じように担っているのだ。

したがってアスタネが基本的に、火星空間におけるレオポールの影、写しにすぎないとしても、彼は特別な陰影を帯び、この新しい背景に端からみても馴染んでいる。彼は装飾と模様でおおわれた大きなローブをまとっている。

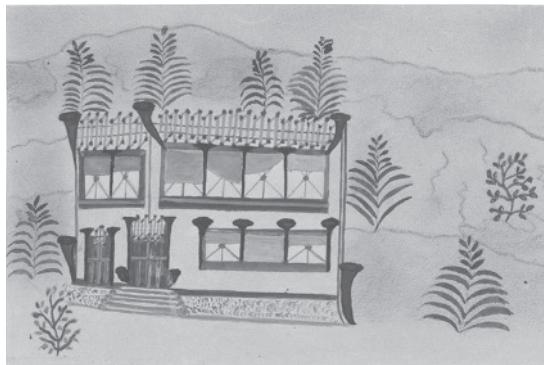


図 12 アスタネの家

緑がかった空。赤みを帯びた地面や山、壁。曲がりくねった幹を持つ二つの植物の葉は深紅である。その他の植物は、下の方の長い葉は緑で、上の方の小さな葉は深紅である。窓枠や扉、そして飾りには赤茶のトロンプの形。窓ガラス（？）は白で、カーテンかブラインドはトルコブルーである。屋根の柵（グリル）は黄色で、両端が青。

長い髪の毛に、髭はなく、「片目がもう一方より高く」、黄色くすんだ顔色で、手には白い巻物を抱えているが、そこに彼は、人差し指の先に据え付けられたペン先で書くのである。彼は火星に複数の所有地と異なる住まいを持ち、エレースも自発的なヴィジョンや会合のあいだにしばしばそうした住まいを訪れる。それらの記述はとくに独創性を呈するわけではなく、この世のモノの思い出からなりたっているようで、火星の夢の大気を通過しながら、単にデフォルメされ、奇妙に屈折し、法則もなしに変化しているようである。

アスタネの家（図 12、〔原著〕 152 頁）は四角形で、扉と窓があり、その外観からなんとなく東洋風の建造物を思わせるもので、平たい屋根には植物が茂り、確かに不思議な「格子」とラッパか豊穣の角の形の突起で美化されているのだが、その性質と有用性はよく分からない。内装は感じがよい。家具とオブジェは、違ったように見せようとはしているが、私達のものを思い起こさせる。ちなみに、私達はこうした家具やオブジェの細部は知らないが、ある楽器だけは例外で、それは縦にのびるシリンダーからなっており、私達のパイプオルガンの近い親戚のようである。その前で時折アスタネが、三本足の

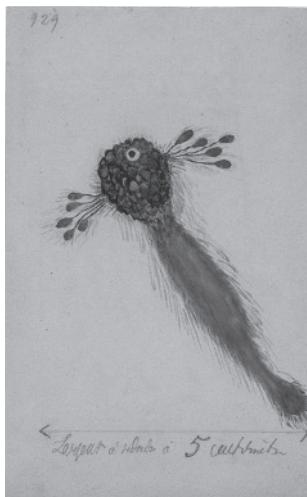


図 18 アスタネの醜い動物

体と尻尾はバラ色。緑の目で中心は黒い。黒っぽい頭で、横に付随した黄土色の突起物があり、体と同じくこれもバラ色の毛でおおわれれている。

スツールによく似た1本軸の腰掛けにすわって演奏するのを、エレーヌは見聞きしている。

庭に移ると、そこでもまたこの世の植物との類似と相違のまぜこぜにぶつかる。目覚めた状態にいるときにエレーヌが火星の植物や花のヴィジョンにとりつかれ、それをほとんど自動化にも近い容易さでデッサンしたり彩色したりするに至ったのはすでに見た。これらの見本例や、風景のなかに散らばった木々を見るにつけ、火星の植生は、すぐにそれと分かるモデルを再生しているわけではないが、基本的には私達のものと変わらないと言うことができる。動物についてはあまり分かっていない。アスタネはしばしば醜い動物を伴っており、その奇妙な形がエレーヌを怖がらせている。それはおよそ60センチほどの長さで平たい尻尾があり、「キャベツのような頭」で、そこには真ん中に緑の大きな目が付いていて（クジャクの羽のようである）、頭の左右に5、6対の足か耳がある（図18、〔原著〕167頁参照）。この動物は、犬の知性とオウムの軽口を合わせたようなものである。というのも、一方で

はアスタネに従って、何かモノ（どのようにかはよく分からない）を持ってきたりするし、他方では書くこともできるが、それは純粹に機械的で理解することなしにしているのである（私達はこの書き物の見本を目にしたことは一度もない）。じっさい他の動物については、言及されるだけで描写のない小さな黒い鳥（文章 20）と子供たちに乳を与える鹿のようなもの以外、エレーヌは大きなナメクジにも似た恐ろしい水生動物しか見ていないが、それをアスタネは湖面にわたした鉄線をつかって釣っているのである。

アスタネは水辺にある赤い大きな岩場を所有地の一つとして持っており、そこでエレーヌは彼女の尊き手と静かに話したり、彼と一緒にインドで生きていたころの古くメランコリックな思い出を辿ったりするために引きこもるのを好んでいる。こうした話し合いの時の声音は（幸運にもフランス語であるが、エレーヌの会話部分しか私達には聞こえない）、レオポールとの会話のときのものと全く同じである。同じような赤い岩からなる山もあるが、そこにアスタネは、彼のような賢い魔術師にふさわしい、洞窟のような掘ってきた住まいをいくつか所有している。内部にはいろいろあるもののうちエズナルの遺体も見事に保存されていて、そこに靈体離脱したエズナルは時々ゆらゆらとやってくる。アスタネの勧めで、エレーヌが長いことためらって、また少し怖がりつつも遺体に指先で触ったところ、まだそれは柔らかかったという。アスタネが自分の観測所を持っているのも、岩山のなかに掘られたこの家のなかである。それは山を突き抜ける井戸で、それを通じて彼は、私達の地球も含めた天空全体を注視黙考するのであるが（文章 9）、そのときにはキャベツ頭の動物が彼にもってくる望遠鏡を使っている。

賢人としての身分に加えて、アスタネは思慮深い助言者と族長的総督のそれを持ち合わせている。そのようなわけでマテーミという名の若い娘が何回も彼に相談にくるのを見ることになる（文章 22 と 28）。おそらくそれは結婚に関する質問だったのだろう、というのもマテーミはアスタネが統べる家族の祝いの席などのときに、幾度もシケという彼女の恋人あるいは婚約者と一緒に現れたからである。ここでもまた、場所や食事、ダンスパーティの描写は、ファンタジーや子供っぽいアイデアを加えられてはいるが、非常に地

上のヨーロッパ的で洗練された徵を帶びており、エレーヌがこうした火星のお祭りが目の前に繰り広げられるのを見ていた長い半夢遊状態のあいだに時折あげる、驚きや感嘆の叫びにはそれほど値しない。

以下がこの会合の最も大きな部分を占めていたヴィジョンの詳細である（1897年11月28日）。エレーヌは、最初の赤い広大な光のなかに、火星の道が現れるのを見るが、それは角灯や電灯ではなく、家々の壁の光、あるいは窓に照らされている。そうした家々の一つの内部が示される。真四角の素晴らしい部屋があって、四隅をランプのようなものが照らしているが、それは青が二つ、ピンクが二つの、ガラス製ではない四つの球体が積み重なってできている（図19）。それぞれのランプの下には、小さな受け皿とその上に豊穣の角のようなものがあって、水を振り注いでいる。たくさんの観葉植物。部屋の真ん中には植え込みがあり、周りには小さなテーブルがたくさん配置されているが、その表面はニッケルのように光り輝いている。たくさんの人々、火星のローブを着た若者と、長い髪を房にして背中にたらした若い娘たちがおり、娘たちの髪は頭の後ろでピンクや青や緑色の蝶の形に結わえられ、首のところで留められている。彼らは少なくとも30人ぐらいで、火星語をしゃべっている（しかしえレーヌははっきりとは聞き取れない）。アスタネは「今日は見苦しいローブを身につけて」現れ、これらの若い娘たちにたっぷりと親しみのこもった懇懃さを示す。彼は娘達の頬を軽くたたく。彼女たちは彼とは親しい仲であり、彼の髪に手を延べたり、彼の前で手拍子を打って練り歩いたりする（火星の尊敬表現）。彼は一人でテーブルの一つに座っているが、若者たのほうは他のテーブルに、それぞれ2組のカップルずつで場所をとっている。これらのテーブルは、私達のものとは違う花々で飾られている。一つは青い花でアーモンド形の葉が付き、別のものは、ミルクのような白い星形の花がある。また最も美しい花は、トランペットの形で青色や火の色をしており、葉は丸く大きく灰色で、黒色の筋が入っている（図20）。

エレーヌは、アスタネが話のなかで「プゼ」という名を発音するのを聞く。すると長く白いキュロットに黒い帯をした二人の男性がやってくる。一人はピンク色の服、もう一人は白い服を着ている。二人は、模様で飾られたお盆を運んできて、それぞれのテーブルの前を通りながら四角い皿とフォークを置いていくが、そのフォークにははっきりとした柄がなく、平らな部分の先に2センチほどの3つの突起が付いている。グラスの代わりに、ティーカップのような、銀の網目の縁取りがあるタンブラーがある。次に桶のようなものの中に伸びたネコに似た動物が焼かれて持ってこられ、それがアスタネの前に置かれたが、彼はそれをねじ曲げて、指先に付けた銀のツメで手際よく切り分ける。四角に取り分けられた肉片は、客人達のために、肉汁をうける溝のついた四角い皿の上に配膳される。全員がこの上なく上機嫌である。アスタネが各テーブルに次々に座ると、若い娘達が髪の毛に手を伸ばす。新しいお皿が運ばれてきて、ピンク、白、青の枝々の上に花が一つ植えられている。枝は溶けて、花も一緒に食べられる。それから客人達は部屋の隅にある給水器で手を洗いに向かう。

今や、部屋の仕切りの一つが劇場の幕のように上がり、エレーヌは光の球体や花や植物で飾られた素晴らしい部屋を見る。天井にはバラ色の空に浮かんだバラ色の雲が描かれてあり、また壁の周りにはソファーや浮いたクッションが置いてある。すると10人の楽員からなるオーケストラがやってくるが、彼らは1.5メートルの高さの金色のじょうろのようなものを抱えており、大きな開口部には丸い蓋がつき、頸のところには熊手のようなものがあって、そこに指を置くのである。エレーヌはフルートのような音楽を聴き、みんなが体を揺らすのを見る。彼らは四人ずつになり、身振り手振りをしながら、八人のグループになる。彼らはゆっくり滑るように動くが、ダンスをしているとは言いがたい。互いの腰に手をまわすのではなく、距離をとって肩に手を置いている。ひどい暑さで、彼らも中で焼けてしまいそうだ！ 彼らは動きをとめ、散歩したり、おしゃべりしているが、ちょうどそのときエレーヌは背の高い若

い茶色の髪の娘（マテーミ）と小柄な若者（シケ）が文章 20 の最初の言葉を交わしているのを聞く。それから彼らは赤い花の太い灌木（タメッシュ）の方向に離れていき、しばらくすると口メと連れ合いがそれに続く。

この時、1 時間 15 分続いたヴィジョンが消え始める。エレーヌは全てを描写するあいだ立ったままであったが、ここから完全な夢遊病状態に入って座ると、アスタネが、彼女が先ほど聞いたり繰り返したりした火星語の文章を書き取らせた。ヴィジョンを見ているあいだは、レオポールが彼女の体の脇にぶらさがった左手をとって、私が低い声でする質問に人差し指を使って答えていた。そのようにして、私はこの火星の場面は結婚式でも特別な儀式なのでも全くない、単に親族のお祝いだと、それはエレーヌの思い出でも想像でもなく、今現に火星で起こっている現実だと知ったのである。またこのヴィジョンを見せたり音楽を聴かせたりしているのはレオポールではなくアスタネであり、レオポール自身はこれら全てを見聞きはしていないが、スマス嬢が見たり聞いたりしていること全てを知っているのだということ、等々。

アスタネがホスト役を務めた、この親族のお祝いのレジュメは、火星世界のオリジナリティーの度合いを教えてくれる。他の出来事に関わるヴィジョンも、同じような次元のものである。火星の新生児室（文章 36）、私達には未知のメカニズムを持つ車の一種、「ミザ」を用いた旅行（文章 29）、小さいアーニーの遊び（p. 163）、等々の記述を読んでいただきたい。つねにそれらは私達のうちにあるものの一般的な模倣と、些細な細部における子供じみた改変との同じような混合物なのである。

プゼ。ラミエ。その他の人物。

火星のヴィジョンを通り過ぎていくその他の人物について、私達は長いこと言及できるほど多くを知っているわけではない。名前がもつともよく挙がるのは、プゼである。宴の最初にアスタネが、どういう資格でかは分からな

いが、ブゼを呼んだのを見たところである。他のところでは、ブゼが、背がすっかり曲がって震え声で話す小柄で哀れな老人ユピエに付き添われているのに出会うが、湖岸を夕方散歩しながら、彼はユピエと一緒に庭仕事か、あるいは植物の勉強をしている（文章 14）。彼はまた、ミザでの旅行の際に現れており、パニネという見知らぬ男性の傍にいて、サイネという息子を伴っている。この子はどのようなわけでか頭に傷を負っているようだったが、そこから快復して両親が大いに喜んでいる（文章 23、24）。

最後にラミエについて少し言及しておこう。彼は 1898 年 10 月、話題に上がる火星外の世界の啓示者として最初に姿を現した。この新たな登場者に関して、私達はまだいくつかの最近の文章（文章 31、35、38、40）を伴ったヴィジョンしか持ち合わせていない。彼に関して確信をもって何かを言うには情報が少なすぎる所以である。しかしながら、心理的起源という観点においては、彼は分身、僅かに改変されたアスタネの残響（アスタネがレオポールの残響であるように）にすぎないのではないかと私は強く疑っている。つまり実際のところ、スマス嬢の想像力が自身の支配的な感情の性向に答えるために創り出した主役の第 3 バージョンというわけである。これまでに明らかになったことによると、ラミエはアスタネの教え子でしかなく、賢さの上では彼より劣った天文学者なのだが、すでに彼と同じ特権、すなわち普通の火星人は全く持ち合わせていない能力である、エレーヌの腕を独占し彼女の手を借りて書くという特権を享受しているのである。さらに意味深く、また決定的だと思われるのは、ラミエは、アスタネとレオポールと全く同じ情愛表現の機微をスマス嬢の上に注いでおり、その見返りとして、彼は單にスマス嬢のそばにいるだけで、彼女を恍惚とした安らぎの状態に導き入れようとしているのである（文章 39）。

私達に似ている者と私達とを比べた時に、その特徴が何よりもまず私達が彼らに与える感情や、彼らが私達に与えているであろう感情に存するならば、レオポール、アスタネ、ラミエのあいだには、エレーヌに関する事には何の根本的な違いも認められない。彼らは同じ一つの情愛関係が三つ巴で再現されたものにすぎず、この三人の人物像を見れば、彼らが根本的に同一人物

の三つの様態、三種の分かりやすい変装であること、この同一人物の方は、すでに何回も述べているように、スミス嬢という現実の存在の催眠的下位区分と見なされることは、間違っていないと思うのだ。火星外世界の探求、いやその創造ということに関して、アスタネはラミエに自分の力を譲渡したようであるし、それはアスタネ自身、火星に関する事柄に関して、レオポールから授けられたものと同じようである。——しばしばアスタネとレオポールがそうであるように、アスタネとラミエがときに一緒に現れ、同じヴィジョンのうちに共存する事実は、彼らの基本的同一性の反証とはならない。なぜなら同じようなことは夢のなかでも起こるからで、夢で人はときたま自分自身の分身と散歩したりおしゃべりしたりもするからである。覚醒状態で自らの分身と出会うことは、靈媒にあっては非常に珍しい出来事でもないのだ。エレーヌにさえ、全くトランス状態になく出席者と会話をしていた会合の際、自らが二つの生き写しとなって彼女の数メートル前に現れ、まるで、彼女がその場でうまく言い表したように、部屋に合わせて「三人のスミス嬢」がいるというようなことがあったからである。

そうとはいえ、もし火星と火星外の物語がこのまま発展し続けるのなら、ラミエの真の人物像に関して、より完全に明らかにするのはもう少し先延ばしにしておくのが賢明だろう。おそらくマテーミとシケのカップル、そしてサゼーニ、パニーネ、小さなビュリエ、ロメ、フェディエ等、その他多数の人物に関しては、いつかより詳しく知る日が来るかもしれない。彼らに関しては、私達は名前ぐらいしか持ち合わせておらず、エズナルやアスタネという中心人物とのあり得る関係について、全く見当もついていないのである。

IV. 火星物語の作者について

火星の輪廻が提示する一般的な考察は、それを火星という惑星に関する真正の情報とみるか、あるいは靈媒の想像力の単なるファンタジーと見るかによって、もちろん変わってくる。最初の説の信奉者には、こうした交信全てがもたらしうる結果——それがあればの話だが——を、あちら側の人類の文明から離して考察する務めを委ね、私自身は彼らに別の調査方法——できれ

ば交霊術を使わない——の発見が、遅からず彼らの推理の正しさを別個のやりかたで裏付けられるようにと願うにとどめよう。それを持ちつつ、私の方は第二の推察に留まるべきだと、また火星物語には、その火星という対象よりもその作者についての情報を求めるべきだと思っている。

この見知らぬ作者には、二、三の点で驚かせられる。

1. まず、天文学者だけでなく、言うなればおそらくより大勢の、多少とも膾炙した科学知識を持ち、この宇宙の神秘について関心を抱く世界中の人々の注目を現時点で集めている事柄に関して、作者は——それが全くの無視でないにしたら——奇妙な無関心をきめこんでいる。まず第一に火星の運河だが、この話題の運河とそれが一時的に二重化したというのは、靈媒の自我の二重化よりも謎が深い。次にその川縁に推測される文化の分布、極周辺の雪の溶解、次々に洪水があつたり焼けたりしている領分における土壤の性質と生命条件、アマチュアの自然学者が近隣の惑星に関して必然的に問うであろう、水圈学、地理学、生物学にかんする幾千もの質問——そうしたもの全てを、火星物語の作者は知らないか、全く気にかけていない。私達に沸き起こる疑惑や騙されることへの恐れが、作者を押しとどめているわけではないとは分かっている。というのも、こうした疑惑や恐れは、これから見る言語的領分では当然のように出てきたのだが、作者はまったく気にかけなかったからだ。ここから私は、作者にとっては物理化学や自然科学の問題は、本当に存在していないのだと結論づける。

社会学的な問題も、それほど作者を悩ますものではない。なぜなら火星のヴィジョンにおいて、火星人があらゆる場所に現れ、自発的に会話をを行っているにも拘わらず、彼らは惑星の市民社会や政治の仕組み、芸術や宗教、経済や産業、人間関係について、私達に全く教えてくれないからである。国々の間の境界線は崩れているのだろうか、あちらの世界には恒常的な軍隊もなければ、交通用あるいは灌漑用運河の巨大な網を運営管理する労働者のグループももはやいないのか？ エズナルとアス

タネは、そのあたりのことについて教示する労をとってくれなかつたし、フェミニズムや社会的な問題に関してもそれは同じである。複数のエピソードから、私達のところと同じように、家族が火星文明の基礎にあるのが見分けられそうである。しかしこの点について直接の詳しい情報がもたらされているわけではなく、また惑星の他のところで家族制とは別形態をもつ文化が存在するのかも分からぬ。この物語の作者が、科学的と言えるような配慮を全く感じていないこと、また当初ルメートル氏の願い（〔原著〕139頁参照）に応答するという気遣いを見せていたにもかかわらず、火星という惑星と推定されるその住人という考えが今日文化人のあいだに引き起こしている問い合わせの気持ちを微塵も持っていないことは確かである。

2. 火星物語が私達に提供してくれないことについて非難する代わりに、こちらの世界にあるものを比較項として取り上げつつ、物語が提供してくれているものを正当に評価するとすれば、私がすでに一度ならず触れた二つの点に驚くことになる：火星世界と私達を取り巻く世界とが、大まかな輪郭において根本的に一致していること、そして山ほどある副次的な詳細に現れる、その子供っぽいオリジナリティーである。例えば家族のパーティ（〔原著〕p.169）を見てほしい。間違いなく、そこで人は握手の代わりに髪の毛をなでるという仕草で尊敬するアスタネに挨拶している。若いカップルたちは、腰ではなく肩を互いに持ちながら踊っている。観葉植物は私達の知っている種類には属さない。演奏家のトロンボーンには蓋がついていて、フルートのような高音を出す、等々。しかし、私達の慣習や風習と比べたときの、このたわいもない違いを抜きにすれば、全体として、また一般的な印象として、火星は全く私達のところと同じようなのである。火星の風俗と私達のようなヨーロッパ的生活との間の距離は、後者とイスラム文化や未開人のそれとの間にある距離ほども離れていない。

室内場面や野外場面とその舞台装置を作り上げた想像力は、驚くほどに平穏でバランスが取れており、現実や本当らしさにこだわっている。

工業の驚くべき創造物を見ても、すぐに理解できない事柄には私達はもはや驚かなくなってしまったが、この想像力もそれ以上の新奇性を發揮しようとはしていない。見えない動力で数珠状のものの上を走る「ミザ」を見る驚きは、道路を行き交う多数の車を初めてみた人が感じる驚異と大して違いはない。道を照らすために家の壁の厚みにはめられた色つきの球体は、そうではないと知りつつも、私達の電灯を強く思い起させた。アスタネの持っている飛ぶ機械は、おそらく別の形を取って、もうすぐ実現されるだろう。だが製造業者以外で、一体誰が新しい発明品の形態や原理を気にかけて、アприオリにそれは不可能だと思い切って宣言することができるだろうか？　船を通すために水の下に消える橋（文章 25）は、技術者の視点は別にしても、同じ効果をあげる跳ね上げ橋と同じように自然に見える。アスタネの「降靈術能力」、これはオカルト心靈主義の思想から借りてきたものであることに間違いはなく、スマス嬢個人にしか関わらないし、その他の火星の場面には登場しないのであるが、この能力以外に、この地球上のエンジニア達から得られるもの、また得られそうなものを超えるものは、何一つ火星上にはない。

従って新しいもの、見たことのないものを作り上げるために、この物語の作者は単に通りで見て驚いたものや、子供たちが自分用に作り上げるようなものからインスピレーションを受けたのである。これは 10 才～ 12 才の悪気なくお利口でかわいい想像力であり、それがあちらの人々にソース用に溝のついた正方形のお皿で物を食べさせたり、一つ目の醜い動物にアスタネの眼鏡をかけさせたり、ペン軸の代わりに人差し指のツメに付けたペン先で書かせたり、牝鹿に似た動物の乳房から直接チューブを通して赤ん坊に乳を飲ませたりしているのである。『千夜一夜物語』、オウイディウスの『変身物語』、お伽噺、あるいは『ガリバー旅行記』のようなものは何もない。鬼や巨人、本物の魔法使いはこの火星の輪廻には出てこない。言うなれば自分たちの世界とはできるだけ違う世界をつくる課題を与えられた小学生の作品のようだが、そうとはいえ現実味があり、それから外れては異世界の存在もないだろう馴染みの

大枠のところは当然尊重しつつ、しかしながら山ほどの細かい点に関しては、短く狭い経験世界が許す限りの範囲で、子供らしいファンタジーの赴くままにまかせているかのようである。

3. このような恣意的で取るに足らない改変を脇にすれば、火星物語は、その特徴の多くに、はっきりと東洋風の陰影を帯びているが、この点についてはすでに何度か指摘しておいた。アスタネの黄色い肌色と長い黒髪。全ての登場人物の衣装、装飾がついていたり、派手な色調の貫衣、ヒモ付きサンダル、平らで白い帽子、等。女性の長い三つ編みと髪の毛についた蝶の形の飾り物。パゴダやあずま屋、ミナレットのついたおかしな形の家々。明るく温かい色をした空や水、岩や植生。小鐘楼のようなものを備えた小さな突出部が周りを囲む湖（図13、14参照）等。これら全ては、日本や安南、中国、インド、他に何があるか知らないが、こういった場所に見かけは似ており、しかもそれら全てを一度に見せている。注記すべきは、こうした極東の印象は純粹に外見上のもので、物語全体のいわば視覚的部分のみに関することで、人物の性格や慣習にまでは全く浸透していないことである。まるで、先ほど話した小学生が、遠い国々の写真か彩色版画を見たが、住んでいる人たちの風習について正確なことは何も知らないので、自分たちの国とはかなり異なったこうした形状や色彩の全体からくる混乱した印象を見たままに留め置き、創作しなさいと言われた新世界の図版にできるだけ個性的な側面を与えるとして、このエキゾチックな上塗りを塗って楽しんだかのようである。

私がこれまでに書き留めた、火星物語の作者に見られる特徴の全て、そしてその他の事柄も、一言で要約できる。それは芯から子供っぽい、という性格である。見知らぬ世界の絵を描いてそれを正確で真正なものと言いはる企てに真剣に取り組むため、あるいはオリエンタル風に変装したり周囲の現実の日常的事柄に子供じみた奇異さを散りばめることで簡単に変化を与えられると想像するため、ここに必要なのは幼少期の無邪気さと何事にも動じない純真さであり、それは何も知らないがゆえに何も疑わない。普通に文化的で

人生経験を多少積んだ者であれば、大人は決してこんなくだらない話を作り上げるのに時間を費やすことはしないだろう。通常の状態であれば発達して知的なスミス嬢なら尚更のことである。

後に続く章において、これまで考えてこなかった火星語の問題を検討する際に、火星物語の作者に関するこの暫定的な概観を確認し、また補完していくと思う。